

〔原著論文〕

ソクラテスはなぜ殺されたか？  
－ キルケゴール『哲学的断片』を用いて－

羽入 辰郎<sup>1)</sup>

Why Was Socrates Killed?  
－ With Reference to Kierkegaard's "Philosophical Fragment" －

Tatsuro Hanyu<sup>1)</sup>

Abstract

Why was Socrates executed? In this paper I consider this problem with reference to Kierkegaard's "Philosophical Fragment". If Socrates' theory of recollection was correct, it is difficult to understand why Socrates was hated by his partner in dialogue after helping to remember the truth which was only sleeping in his mind. Here Kierkegaard's point that man opposes the truth is very helpful. Man forgets the truth because he wants to forget it. But Socrates compels him to remember the truth, so the partner is angered by Socrates who breaks the good balance of remembrance and forgetting. Perhaps, strange as it may sound, man has to remember the truth in order to forget it. In order to forget the truth, man always needs to watch it carefully so that it may not rise to the surface of his consciousness. Even Socrates had a fear of the fury of his partner, but Socrates endured it and continued his dialogue. Usually we learn to hold our tongue to tell the truth in front of the subtle angry look which comes over the partner's face. It is a social rule of mankind. But Socrates disregarded this fundamental rule, so he was sentenced to death.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 11 : 21 - 28, 2010)

キーワード：対話、想起説、死刑判決

Key words : dialogue, theory of recollection, execution

要旨

ソクラテスはなぜアテナイ市民から死刑判決を受け、殺されたのであろうか？魂は何度となく生まれ変わっているのであり、だから何が真理であるかを魂は実は全て知っているのであり、ただ忘れていただけなのである。だから、それを思い出させてやればいいだけなのである、というソクラテスの想起説がもし本当に正しかったとするならば、なぜソクラテスは対話相手から憎悪されたのであろうか？ソクラテスは自分が真理と思っているものを相手に無理に押しつけたわけではない。真理は元々相手の心の中にあったのである。ソクラテスはそれを引き出したに過ぎない。鍵は、忘れていたかっことを思い出させたということにある。忘れたという形で覚えているというこの微妙な自己欺瞞にある。本稿ではキルケゴールの『哲学的断片』を用い、なぜソクラテスは相手から憎悪を引き出してしまったのか、この問題を探る。

I. ソクラテスの人間把握の誤り

倫理学史と哲学史の冒頭に位置しているのが、古代 のクレヨンしんちゃんといふ言い方がないような、ソク

---

1) 青森県立保健大学健康科学部栄養学科

Department of Nutrition, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

ラテスという、この人物である。この人物は、七十歳になった時に、アテナイ市民たちから死刑判決を受けて殺された。問題は、この人畜無害な人物が、なぜ死刑判決を受ける羽目になったのか、ということにあるのであるが、それは人間というものに関する彼の考え方が根本的に間違っていたからである。間違いは二点ある。

一点目の間違いは、他の人は自分より頭が良いはずだ、これが彼の出発点であった。それを証明しようとしたわけである。で、頭が良いとか物知りだとか、そう世間から噂され尊敬を受けている人物達を次々に質問責めにしていっていったわけである。そうすると、実はまっさらの馬鹿だった、ということが彼とその人物との対話を聞いている人達皆に判ってしまう。判ってしまうような形で彼は対話を進めていってしまったわけである。「どしてえ?」「なんでえ?」と。これはもう、世間で尊敬されている人達の逆鱗に触れることである。殺されても仕様がな。そして、なんでまた自分以外の人が自分より頭が良いはずだ、なんてことを証明しよう、などという馬鹿なことを始めてしまったかと言うと、御神託が下りたわけである、ソクラテスが一番頭が良いと。これはまあ、しんちゃんが一番頭が良い、と言われたようなもので、キョトンとしてしまう。「嘘だあー」とソクラテスは思ってしまったわけである。「そんなわけがない」と。

要するに、デルポイの神殿に祭られている神アポロがソクラテスより知恵のある者はいないと言った、ということである。さて、問題はここからである。この時ソクラテスが、「うん、なるほど、デルポイの神は俺様のことをさすがによく見ておるわい。やっぱり俺様が一番知恵があるか、ふむふむ…」と思えれてさえいれば、彼は死なずに済んだのである。ところが、哀しいことにソクラテスにはそうは思えなかった。自分が頭が良いとは思えなかった。ここから、ソクラテスの悲劇が始まる。普通、ある程度頭が良いと、自分の頭の悪さというものに気づくようになる。頭が良いと、自分の頭の悪さというものを気づく位のレベルには、普通人間は達してしまう、ということである。だから、ソクラテスは自分が頭が悪いということを感じていたわけである。だからこそ、一番頭が良いのはソクラテスだ、などという神託を聞いて、うろたえてしまったわけである。彼を最終的に不幸へと導いた彼の探究は、これをきっかけとして始まった。

## Ⅱ. 頭がいいと言われている人を探しに出掛けたソクラテス

ソクラテスは考えに考えた末に、この神託が間違いであることを証明しようと決心した。そして、その手段として、自分より頭の良い人が沢山いる、ということを実証しようとしたのである。そして、よせばいいのに、頭の良い

人を探しに出掛けた。頭が良いと世間で言われている人の所へ行ったら、その人が頭が良いことを証明しようとした、ということである。これはもう非常に危険である。頭が良いことを証明しようと、質問責めにされたら、実は頭が悪いことを暴露されてしまうことになる。そして、さんざん質問責めにした挙げ句の果てに、しんちゃんのように、「へー、こんなことも分からないんだ。別の人の所にいこう」ということになるわけである。その部分のプラトンによる描写<sup>1)</sup>を引いておこう。

「さてその人を仔細に吟味しているうちに、—— 名前を挙げて言うには全く及ばないでしょう。それは政治家の一人でしたが〔ソクラテスを訴えた三人のうちの一人、アニュトスを指すと思われる —— 訳注より〕—— アテナイ人諸君、彼を相手として吟味しているうちに、私は何か次のようなことを経験したのです。すなわち、彼と対話を交わしているうちに、その人物は知恵があるものと他の多くの人間に思われ、また、とりわけ本人がそう思っているけれども、しかし実はそうではないと私には思われたのです。それから私は、彼が知者であると思っはいるけれども、実はそうではないのだということをはっきり分からせようと試みたのです」(プラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』三嶋輝夫・田中享英訳、講談社学術文庫、2002年、21c。強調は引用者。以下では、「プラトン『ソクラテスの弁明』」と略す)。

東大教授にこんなことをやったら、こりゃ、怒りますね。絶対。世間的体裁というものを目茶苦茶にされるわけですから。昨日まで賢い人物として尊敬を集めていた自分というものが泥靴でふみじられるようなものですから。結局、ソクラテスというのは場面の礼儀というものを全くわきまえることの出来なかった人物なのである。対話編を読んでいて気づくのは、この男、自分の質問が相手をいかに怒らせているか、いかに相手の逆鱗に触れているか、ということに対して全く神経を欠いている、恐ろしく鈍感だ、ということである。この無神経さ、鈍感さが彼に死をもたらした。自らの無神経さの故に、彼は毒杯を仰がねばならぬ羽目に追い込まれた、とも言えよう。〔但し、この鈍感さは、ソクラテスにとって半ば意図的なものでもあった。このことは最後に触れる。〕

さきほど、彼の人間把握は二点で間違っていた、と述べた。一点目の間違いは、他の人は自分より頭が良いはずだ、これであった。では、二点目は何であろうか?これは、前記引用文の最後の部分に明瞭に表れている。

「彼が知者であると思っはいるけれども、実はそうではないのだということ、彼にはっきり分からせようと試みたのです」などと、死刑にされるかも知れぬ自分の裁判なのに、こんな呑気なことを法廷で言っているこの人物には、いい加減腹が立ってきますが、この時、この

人物は、前にも述べたように、丁度七十歳であった。彼がデルポイの神託を聞いて、世間で知恵があると言われていた人の所を巡り始めたのは四十歳か四十一歳の時であった。つまり、三十年間も、知恵あると世間で言われていた偉い人の吟味をやり続けていたわけである。まあ、アテナイ市民もずいぶん和我慢強かったとは褒めて上げることも出来よう。

「彼が知者であると思っではいるけれども、実はそうではないのだ」ということを分からせようと試みた、などとソクラテスは言っているが、身も蓋もなく言ってしまうと、これは彼は一体何を分からせようと試みたのであろうか？「彼が知者であると思っではいるけれども、実はそうではないのだ」ということは、彼は馬鹿だ、ということをはっきり分からせようと試みた」ということである。ソクラテスがやったのは、そういうことである。

これは怒りますね。嘘だと思ふなら、東大教授にこんなことを教え子たちの見せる前でやってみて下さい。その東大教授が、自分のことも丸で知らないまっさらの馬鹿だってことを、周囲にいる東大生たちにもはっきりと分かるように分からせて見ることです。ソクラテスの文章に東大教授を嵌〔は〕め込んでみましょうか。そうすると、どんなにとんでもないことを、この人物が三十年間もやっていたかが、よく分かってきます。

“彼が東大教授であるから知者であると思っではいるけれども、実はそうではないのだということ、その東大教授にはっきり分からせようと試みたのです。”

こんなことをやってしまったら、大学院受験はもう無理ですね。ここにソクラテスの人間把握の第二の間違いがはっきりと表れてきている。ソクラテスの危険な楽天主義の一つに、人間は真理に目覚めれば喜ぶはずだ、という思い込みがある。さすがに、死刑法廷に引き出されたこの場では、「そこでそれが因〔もと〕で、彼はもとより、その場に居合わせた多くの人々に憎まれるに至ったのです」(プラトン『ソクラテスの弁明』、21c)などと、しおらしく述べてはいるが、どこまで本当にそのことがソクラテスに分かっていたのか、どうも怪しいのである。

### Ⅲ. ソクラテスの人間把握の第二の誤り

このソクラテスの二点目の人間把握の誤りに関しては、キルケゴール<sup>2)</sup>がはっきりと指摘しているので、キルケゴールのソクラテス批判を用いながら、この点を明らかにしていこう。

キルケゴールは『哲学的断片』<sup>3)</sup>〔この『哲学的断片』という著作の題の付け方が、そもそもヘーゲル哲学体系に対する皮肉である。〕の冒頭で、次のような問題提起をする。

「真理は学び取れるものであるか。私たちはこの問いか

ら始めよう。これはソクラテスの問いであった」(キルケゴール『哲学的断片』杉山好訳〔『世界の名著40・キルケゴール』所収〕、57頁。以下では、「キルケゴール『哲学的断片』」と略す。)

ところがキルケゴールは、ここでソクラテスが『メノン』で『抗争的命題』と呼んだあの難題が立ち現れる」(キルケゴール『哲学的断片』、58頁)と言う。ここでキルケゴールの言う「抗争的命題」というのは、プラトンの記述によれば、次のようなものである。

「分かったよ、メノン、君がどんなことを言おうとしているのかが。君の持ち出したその議論が、どのように論争家好みの議論であるかということに気づいているかね？いわく、『人間は、自分が知っているものも知らないものも、これを探求することは出来ない。というのは、まず、知っているものを探求することは有り得ないだろう。なぜなら、知っているのだし、ひいてはその人には探求の必要が全く無いわけだから。また、知らないものを探求することも有り得ないだろう。なぜならその場合は、何を探求すべきかということも知らないはずだから』——」(プラトン『メノン』藤沢令夫訳、80e、岩波文庫、2002年。以下では「プラトン『メノン』」と略す)。

要するに、すでに知っている真理であるなら、何もわざわざ探し求める必要はなく、また他方では、知らない真理は、知らないのであるからそもそも探し求めようもない、ということになるからである。かなり巧妙な詭弁であることは、分かって頂けるであろう。当時、ギリシャではソフィストという、金を貰って、法廷で白を黒と言いくるめるような弁論術を教える連中がいたが、確かにいかにもソフィスト好みの議論の立て方ではある。

「この難問を考え抜いたソクラテスは、次のような結論に達する」(キルケゴール『哲学的断片』、58頁)とキルケゴールは言うのであるが、実際に『メノン』を読んでも、この問題にソクラテスがそれほど苦しんだという感じはない。かなりキルケゴールの脚色が入った部分と言わざるを得ないのである。ソクラテスは簡単に、次のように言っている。

「こうして、魂は不死なるものであり、すでに幾たびとなく生まれ替わってきたものであるから、そして、この世のものたるハデスの国のものたるを問わず、一切のありとあらゆるものを見てきているのであるから、魂がすでに学んでしまっていないようなものは、何一つとしてないのである。だから、徳についても、その他色々の事柄についても、いやしくも以前にも知っていたところのものである以上、魂がそれらのものを想起することが出来るのは、何も不思議なことではない」(プラトン『メノン』、80c-d。強調は引用者<sup>4)</sup>)。

要するに、ここでソクラテスは、魂は不死で何度も生

まれ変わっているから、実は全部知っている。ただ、忘れてるだけだ。それを思い出させてやっているだけだ、と言っているわけである。

キルケゴールは、こうしたソクラテスの対話の相手への関わり方こそ、「一人の人間が他人に対して果たし得る最高の務め」(キルケゴール『哲学的断片』、58頁)なのであって、「ソクラテスは、己の分に安んじ、また他人に対しても、しかり、最も愚かな人間に対しても、単なる『切っ掛け』の役割を越えないだけの勇氣と知恵を持っていたのだ」(キルケゴール『哲学的断片』、60頁)と手放して称賛するのであるが、これはソクラテスの立場からすると、余り大したことではない。というのは、靈魂不滅説をソクラテスは本気で信じていたからである。

アテナイの法廷で死刑判決を受けた後も、約一ヶ月間、ソクラテスは牢の中で生きていた。これは当時のアテナイの風習で、デロス島へアポロン神への供物を運ぶ船が出帆して帰って来るまでは、汚れとなるので、死刑の執行はやってはいけないことになっていたからである。船が帰って来たのは三十日後であった。だから、丁度三十日間、弟子たちは牢にいるソクラテスと話をすることが出来た。弟子や友人たちは必死になってソクラテスに逃亡を勧めた。そもそも獄吏はソクラテスの牢に鍵を掛けていなかった。それに当時は、さほどの額でもない金を獄吏に握らせれば、逃亡は簡単に出来たのである。ところが、そうした弟子や友人たちの勧めをソクラテスはあっさりと拒否してしまう。

理由は簡単である。ソクラテスは肉体は死んでも、魂は死なないと本気で思っていたからである。だから死刑が全く怖くなかったのである。ソクラテスによると、人間の魂は不死であって、何度も生まれ変わっている、というのである。だから、魂は実は何でも知っている。ただ、忘れてるだけだ。何が真理かを忘れてるだけだ。自分はそれを思い出させてやっているに過ぎない。もともと持っていた真理を思い出すのを手伝っているだけだから、自分は産婆役に過ぎない、という主張がここから出て来る。

#### IV. では、なぜ真理を想起させられただけで人は怒るのか？

ところが、この主張に従うと、理解出来ないことが一つ出て来る。ソクラテスの仮定からすると、人は真理を忘れてるだけなのである。ソクラテスは、それを思い出させただけなのである。別に、相手に自分が真理だと思っていることを押しつけたわけではない。では、だとしたら、なぜ死刑判決を受けるほどにソクラテスは憎まれたのであろうか？相手がもともと知っていた真理を思い出させたに過ぎないならば、思い出させられた相手は、なぜあそ

こまでソクラテスを憎んだのであろうか？ソクラテスの言い方では、そこが分からなくなるのである。つまり、死刑判決を受けたこの時点に至っても、このソクラテスという古代のクレヨンしんちゃんには、自分がなぜ死刑判決を受ける羽目になったのか、その理解が出来ていないのである。

この問題を、キルケゴールの言い方で、言い換えてみよう。もしキルケゴールの言うように、ソクラテスが、“すでに相手が持っていた真理を自分自身で思い出させるように呼び覚ましたに過ぎず”、決して自分の真理を相手に押しつけたりしたのではなく、相手に対して“単なる「切っ掛け」の役割を越えない”という“己の分に安んじ”ていたとするならば、なぜ相手はソクラテスに対してあそこまで腹を立てたのか？もしキルケゴールの言うように、「およそ問い掛けるという行為の内にある窮極の意図は、問い掛けられた人自身が真理を持っており、それを自分自身で掘り起こさねばならぬというこの一事に尽きる」(キルケゴール『哲学的断片』62頁)とするならば、即ち、もともと自分が持っていた真理を単に気づかされたに過ぎぬとするならば、問い掛けられた者がそのことに腹を立てる必要が一体どこにあるのか？己を「切っ掛け」に過ぎぬものとして厳しく自己抑制し続けたソクラテスが、にもかかわらず、なぜ死刑判決を受けるに値するほどの怒りを、問い掛けた相手から引き出してしまったのであろうか？

われわれの疑問を、今一度厳密に定式化するならば、次のようになろう。

もしも問い掛けることが、問い掛けられた者自身ですでに持っていた真理を想起させることに過ぎぬとするならば、問い掛けられた者がそこで出会うものは、自己自身がすでに持っていた真理に他ならぬはずである。だとすれば、ソクラテスの問いが何故問われた者の側に怒りを引き起こしたのであろうか？そのことは、このままでは理解不能である。なぜならこの場合、人が出会うものは、すでに自分が持っていた真理に他ならぬはずだからである。他人から真理を強制されて腹を立てるということならいざ知らず、すでに自分が持っていた真理を気づかされる時、人はなぜ腹を立てるのか、その経緯は、ここまでのキルケゴールによる定式化によっては明らかにはならない、と。

#### V. 忘りたいから忘れる —— 意識的な忘却操作

人が真理を忘れたという形で実は知っていること、この認識において、ソクラテスは誤ってはいなかった。では、忘れていたことを思い出させてもらっただけであるのに、人はなぜソクラテスに腹を立てたのか？

忘れていたことを、思い出させられたからである。鍵は、“忘れたという形で知っている”というこの微

妙な言い回しにある。確かに人は、真理を忘れていたに過ぎぬのである。但し、そこで決して忘れられてはならぬことは、人は忘れたいから忘れていたのである、というこのことである。そして、真理を忘れたいから忘れてしまった、というこの状態に先行するのは、真理を知っていた状態に他ならない。即ち、何が真理であるかを知っており、かつ、それを理解する能力も十分有しており、しかも、それが真理であることを腹立たしくも不快に思っていた状態が先行しているのである。そして人は、自らの意志によってそれを忘れたのである。そして今も現に人が真理を忘れているためには、それを絶えず忘れ続けていることが必要なのである。そして今も絶えず忘れ続けているためには、人は自分がいかなる真理を忘れ続けているのかを、きちんと今も覚えていなければならぬのである。

われわれは殊更に逆説を弄している訳ではない。ここで肝心なことは、人が何が真理であるかを実はきちんと覚えていて、それでいて、自己自身に対しては忘れた振りをしている、というこの意識的なすり替え操作のからくりを押さえることである。これは決して、無意識的操作ではない。

意識的操作が出てきた以上、これはもう単なる忘却ではない。真理に刃向かう、人間による意識的な忘却操作である。

「ゆえに非真理とは、ただ単に真理から離れ出てしまっているばかりでなく、真理に刃向かっているのである。真理解能力を我と自ら損なってしまったこと、そして今なおこの真珠を泥足で踏みにじりつつあること、これこそ、真理への反逆の何よりの証拠である」(キルケゴール『哲学的断片』、66頁)。

キルケゴールの言うように、真理解能力が人間にとって本質的規定であるとするならば、人間は真理解能力を、一回捨て去ればこれっ切りとばかりに厄介払いする訳にはゆかぬのである。人間の本質規定に属する以上、何度捨て去っても、そのままに放っておけば、真理解能力の方で追ってくるのである。より正確に言うならば、もしも人間が、自己自身を監視せずに少しでも自然のままに放っておくならば——言うまでもなく、ここでの“監視”は逆説的な意味においてである——人間は真理を真理として理解してしまうのである。即ち、人間が真理解能力を失っているとは、今もなお絶えずそれを捨て去り踏みにじり続けている、ということの意味するのである。即ち、ここで現れてくるのは、人間の側の意志、真理解能力を捨て去り続け、真理に背き続けようという人間の側の不断の意志の働きである。意志の働きが現れてきた以上、この状態はもはや“無知”では有り得ない。キルケゴールはこの状態、即ち、「己が非真理であり、しかも己自身の咎のゆえにそうなったこの状態」(キルケゴ

ール『哲学的断片』、66頁)を、「罪」(キルケゴール『哲学的断片』、66頁)と名付ける。

## VI. 踏みにじるためには、真理がどこにあるのかを知っていなければならない

さて、ソクラテスのあの「抗争的命題」に戻ろう。「人間は、自分がすでに知っている真理を捜し求めるわけではないし、かといって、自分の知らない真理を捜し求めることも同じく有り得ない」(キルケゴール『哲学的断片』、58頁)のであった。「つまり何を捜し求めるべきかも知らないというのだから、これも捜し求められるはずはないのである」(キルケゴール『哲学的断片』、58頁)。このソクラテスの真理に関する定式をキルケゴールは認めていた。では、このソクラテスの定式を、さきほどのキルケゴールの記述に当てはめてみよう。

するとどうなるか?すると、人は「自分の知らない真理に反逆し、踏みにじりつつあることも同じく有り得ない」ということになる。即ち、「つまり、何を踏みにじるべきかも知らないというのだから、これを踏みにじれるはずはないのである」となる。

では、右の命題の対偶命題を取ってみよう。真偽は一致するはずである。[対偶命題というのは「PであるならばQである」という命題の双方を否定にし、命題の順序を逆にしたものである。この場合は、「Qでないならば、Pではない」となる。この二つの命題の真偽は一致する。]

するとこうなる。「これを踏みにじれるというのだから、何を踏みにじるべきかも知っているはずなのである」と。この対偶命題は何を意味するか?

それが意味するのはこういうことである。人は、何が真理であるかを知っているからこそ、真理解能力を捨て去ったのである。人は、真理が何であるかを知っているからこそ、真理を理解しようとはしないのである。即ち、人は、真理とは何か、百も承知の上で、真理に刃向かうのである。

よって、瞬間以前には人間は真理解能力を欠如していた、というキルケゴールの定式は論理的に誤りである[ここでのキルケゴールの言う「瞬間」とは、イエス出現の瞬間を指す。イエスと同時代の人間たちばかりではなく、現代のわれわれにとっても、われわれ個人内部でのイエス出現の瞬間を指す。]。正確には次のように言うべきである。

人は、真理解能力を現に持っているからこそ、それを欠如しているのである、と。或いは、さらに一步踏み込んで、次のように表現すべきかも知れぬ。人は、真理解能力を今もなお現に持っているくせに、欠如しているのである、と。

この状態が、何故キルケゴールが言うように「真理への反逆」であり「罪」であるのかということは、この定式

化によって初めて明瞭となるはずである。

われわれのこの定式化は、他の箇所におけるキルケゴールの記述とも決して矛盾しない。「C 弟子」において、キルケゴールは次のように言う。

「弟子は非真理であったがゆえに、真理から離れ去ろうとする傾向を絶えず示していた。だが真理理解の能力を受け取った瞬間に、彼の歩みは百八十度の転換をする。つまり彼は立ち返るのである」(キルケゴール『哲学的断片』、71頁。強調は引用者)。

ここでのキルケゴールの叙述は自己矛盾を起こしている。“真理から離れ去ろうとする傾向を示す”ためには、真理がどの方角にあるのかを知っていなければならない。真理が、自分から見てどの方角にあるかぐらいのことは、少なくとも承知していなければならぬ、ということである。それを薄々承知していた上で、逆の方向に向かうのである。よって、瞬間によって、弟子は真理理解能力を受け取るのではない。瞬間以前にも、弟子は真理がどこら辺にあるのかを知っているのである。知っていた上で、それから背き去ろうとするのである。

では、瞬間には決定的意味はないのであろうか？或いは、もしも瞬間がこの場合にも意味を持つとするならば、その場合にはいかなる意味を持つことになるのであろうか？

## VII. それが真理であると分かっているながら、認めまいとする人間の側の妄執

瞬間を分かつのは、真理理解能力を欠如していた状態と、真理理解能力を受け取った状態とはもはやない。人間は瞬間以前から、真理を理解する能力を持ち合わせているのである。かといって、ソクラテスのごとく、想起が分かつわけでもない。では何が分かつか？

瞬間以前の状態とは、人間が、真理が何であるかを百も承知しているながら、なお且つ、真理を理解しようとはしない状態のことを指していた。そして瞬間以後の状態とは、人間が真理が何であるかを承知した上で、それに向かっている状態を指した。この二つの状態の間に違いがあるとすれば、それは一つでしかない。人間の側の意志の変化である。即ち、瞬間とは、真理を百も承知しているながら、それを何としても理解しまいとする人間の側の意志が——妄執が、と言ってもよい。真理を百も承知しているながら、それを何としても認めまいとするのは、もはや一種の妄執に他ならない——碎かれる瞬間のことであり、だからこそこの変化は「立ち返り」(キルケゴール『哲学的断片』、71頁)と呼ぶにふさわしいのである。そしてだからこそ、「罪の自覚」(キルケゴール『哲学的断片』、71頁)、即ち、「自分のそれまでの姿は己の咎のゆえであった」という罪の自覚に至ることなくしては、あの立ち返りは

起こり得ない」(キルケゴール『哲学的断片』、71頁)のであり、だからこそ「悔い」(キルケゴール『哲学的断片』、72頁)の痛みを伴うものなのであり、人間にとっては「新生」(キルケゴール『哲学的断片』、72頁)なのである。

しかしながら、以上の叙述が成立するのは、キルケゴールの立場、即ち、キリスト教の立場に立って初めてである。われわれの立場、ソクラテスの立場、人間対人間の関係に飽くまでも留まろうとする立場にとっては、では以上のことは何を意味するであろうか？ソクラテスはなぜ殺されたのか、というわれわれの最初の問いへの答えを、われわれはそこで見出すことが出来るように思われる。

## VIII. ソクラテスに向けられた怒りと憎悪

もしも仮に人が、真理を意識下に抑圧していたために想起出来ずにいただけであったとしたならば——これがソクラテスの想定であった。そして、フロイトの想定でもあった。フロイトが、現代版のソクラテスであったことを思えば、彼の理論が憎悪された理由も自ずと理解されよう——人は真理を指摘された瞬間、一瞬キョトンとして、やがて自分が忘れ去っていた事実の重大さに驚愕し、深刻に一人考え込むに至るか、或いは、今や曇りのない晴々とした表情となって、想起の切っ掛けとなってくれたソクラテスに対し感謝するか、そのどちらかであったであろう。たとえ反応が不幸にして前者であったとしても、数週間後には、人は自分が忘却していた真実の打撃から立ち直り、ソクラテスを感謝の意を込めて訪れたことであろう。

ソクラテスに向けられたのは、しかしながら、感謝でも驚愕でもなく、怒りであり憎悪であった。気づかされて怒るということは、人がそれを承知していたことを示す。そんなことは言われなくても分かっているのである。言われなくても分かっていることを、わざわざしつこく言うから、殺したいほどに腹を立てるのである。

ところで、人が思い出させた相手に対して逆上するまでに、思い出すことが不快な真理とは、一体何に関する真理であろうか？そこまでに不愉快な真理とは、己の姿に関する真理でしか有り得ぬ。

人は、客観的真理に関しては、そこまで逆上することは不可能である。或いは、もしも人が、何らかの客観的真理を指摘されることで逆上する場合には、その指摘によって、虚偽の客観的真理に己をしなだれかけ、それによって己を支えてきていた、これまでの自己の醜悪な姿を共に思い出させられる場合に限るのである。その場合、これまで自分が信じてきた“客観的真理”が誤りであったことを指摘された時、びっくりして、思いも寄らなかったことなので愕然として、衝撃を受け動揺するのではなく——真理であると本気で思い込んでいた“客観的真理”

が、実は何と誤りであったことを指摘された場合には、仰天する方が先で、それを指摘した相手に対する怒りなど生じない——直ちにその人間が逆上したということは、己が支えとしてきたその“客観的真理”が実は虚偽であることを、当人がとうの昔に知っていたこと、しかも虚偽を承知の上でしがみついていたことを明かすことは——「そんなことは、お前なんぞに教えられなくてもとっくに分かっている！」と言えれば分かりやすいであろう——自己自身に関する真理を指摘されて逆上する場合と厳密に平行である。即ち、ここでも結局浮かび上がって来るのは、客観的真理がどうか、ということではなく、虚偽の“客観的真理”に、そのことを承知の上でしがみついていた己の醜い姿である。

### 結論 ソクラテスはなぜ殺されたのか？

ソクラテスが想起させたのは、こうした各人の醜悪な自己の姿そのものであった。人は、この醜悪な自己の姿を正視することに堪えられずに、逆上する。そして人は、自己の姿の醜さに逆上して生じたはずのこの怒りを、絶妙なバランスの上に成り立っていた己の折角の自己欺瞞を台無しにしてくれた、無神経極まりない、この目の前の阿呆に向かって爆発させるのである。自分が徳になかった生き方などしていないことは百も承知しているのである。徳になっていない生活をしながら、それを意識しようと努めているからこそ、徳とは何ぞや？などと問われると不快になるのである。ソクラテスが無視したのは、この想起に伴う不快感と、それを強いてくるソクラテスへの怒りと憎しみである。

ソクラテスの対話篇を読んでわれわれが気づくことは、高まりつつあるこうした相手の怒りを読み取りながらも、そのことで決して臆することなく、彼が飽くまでも問い続けたということである。ソクラテスとして、自分のそうした行為のために自分が憎まれるに至っていたことは知っていた。それを苦しみもし、恐れもしていた。プラトンは彼にこう語らせていた。先の引用に再び戻ろう。

「それから私は、彼が知者であると思っではいるけれども、実はそうではないのだということを彼にはっきり分かせようと試みたのです。そこでそれが因[もと]で、彼はもとより、その場に居合わせた多くの人々に憎まれるに至ったのです。……その後、私は彼よりは知恵があると思われている人のうちの別の人物のところへ赴いたのですが……そこにおいてもまた、その人ならびに他の多くの人に憎まれるに至ったのです。……一方では、憎まれていることを感じて苦しみもすれば恐れもしたのですが、そうは言っても、神のことを最優先しないわけにはいかないとされたのです」(プラトン『ソクラテスの弁明』、21c-e。強調は引用者)。

ソクラテスは知恵があると世間で言われている人を「吟味」することで、相手やその周囲にいた人々から憎まれることからの苦しみにも恐れにも堪えた。殆ど故意にやっているとしか思えぬ程のしつこさで、相手の怒りを刺激するように刺激するようにと逆撫でし続けたこと、そして、どのような怒りを相手から引き出そうと、相手のそうした怒りには全く頓着せずに———しかり、この恐るべき無頓着さこそがソクラテスの勇気であった———ただただ物事の理だけに細心に注目して、どう相手から憎まれようと、丸で阿呆のように問い掛け続けることをやめなかったこと、ソクラテスの偉大さはここにある。ソクラテスとして、自分のやっているこの行為が人々の憎しみを買うことになることを知らないわけではなかった。彼とても、恐怖を抑えながらやっていたのである。事実、プラトンは法廷でソクラテスに次のように語らせている。

「正にこうした吟味が原因で、アテナイ人諸君、私に対する多くの憎しみ、それも最も厄介で深刻な性質の憎しみが生まれ、その結果、多くの非難がそれらの憎しみから生じるとともに、それ、つまり『知者』であるとの噂を立てられるに至ったのです」(プラトン『ソクラテスの弁明』、22c-23a。強調は引用者)。

いっばしの知者として通っていた人間が、人前でただの馬鹿に過ぎなかったことを暴露されてしまった場合、自分のプライドと面子をずたずたにされたことへの恨みと憎しみというものは、相当に根深いものとなる。それまで知者として世間で通っていた時間が長ければ長いほど、人前で恥をかかされたことへの恨みは「厄介で深刻な性質の憎しみ」となる。

しかもこの場合ソクラテスが、片方では憎しみと恨みを買いつつ、一般大衆から『知者』であるとの噂を立てられるに至った」というのは、なおのこと危険である。その分、恥をかかされた人間たちの妬みは一層強まるからである。なぜなら、他でもない、『知者』であるとの噂を立てられたいと願っていたのは、ソクラテスによってまっさらの馬鹿であることを暴露された正にその人間たち自身であるから。自分たちが立ちたいと思っていたスポットライトを当てられたその場所に、自分に恥をかかせたソクラテスが立ってしまったのである。妬みと憎しみは一層強くならざるを得ない。

人は普通、相手の表情に浮かぶ微妙な不快の色を前にして、真理を述べることを口ごもる。それ以上の怒りを引き出すことへの恐怖が、彼をして、真実へと相手に問い掛けることをやめさせるのである。即ち、人は、人間への恐怖から、真実を口ごもることを学ぶのである。人は、人間への恐怖から、真理と真理解能力を自らの意志で捨て去るのである。その方が、はるかに生きやすいから。そしてこれが、人間社会なのである。

ソクラテスとは、こうした相手の怒りの沸騰に全く頓着せずに、人間への恐怖よりもアポロンの神の神託を信じ、本当に賢い人なのか、知恵者であると自分で思っているだけの人に過ぎないのかを、神の神託だけを支えに「吟味」し続けた人間、平気で相手の逆鱗に触れていった人間のことである。ソクラテスとて、人の憎しみ、人の自分に向けられた憎悪が恐ろしくなかったわけではない。ただ、彼はそれに堪えた。神から与えられた使命のために堪えた。人は、人間への恐怖から真理を口にすることをやめるのである。それが人間社会の基本ルールである。ソクラテスはこの人間社会の基本ルールを、無視したのである。ソクラテスが殺されたのは、それ故である。

〔受理日：平成 22 年 11 月 24 日〕

### 〈注〉

- 1) なお、ソクラテス自身は一冊の書物も書き残してはいない。彼は主に当時の体育館のような所で問答するだけで、何も書き残さなかった。全ては師ソクラテスの刑死後、師の言葉を書き綴った弟子プラトンの著作からのものである。ソクラテス自身は、自分の思想内容を書物として残すことには、全く関心はなかったようである。だから、そのままであれば、ソクラテスの言った内容など後世には何も残らなかったはずだったが、ソクラテスの語った内容を、弟子だったプラトンが、師の死後、膨大に書き残した。それがソクラテスの死後も影響を与えた、ということである。  
ところがプラトンは、ソクラテスの死後十年以上も経った頃にかいたりしているのである。したがって、どこまでがソクラテスの真の姿の記録で、どこからがプラトンの創作なのか、という問題が、ソクラテス研究には常に付きまとうことになる。しかも、奇妙なことにプラトンは、自分の著作のほとんど全てを、師ソクラテスと誰かとの対話というフィクションの形で書いてしまったのである。しかし、こんな膨大なものが全て師ソクラテスと誰かとの対話であったわけがないのである。プラトンが比較的初期に書いたもので、かつ、プラトン特有のアイデア論が余り現れていない対話篇はソクラテスの実像をかなり正確に伝えているのでは、という原則的なことしか、われわれには分からない。しかも、プラトンが対話篇をどういう順番で書いていったのかも正確には分からないので、結局、正確なところは一つ分からないとしか言いようがない。『メノン』辺りまでは、かなり正確に実際のソクラテス像を伝えているのでは、とも言われている。
- 2) キルケゴールという人物を、今、簡単に紹介しておく、当時ドイツで大流行していた壮大な体系を持った

ヘーゲル哲学に反対して、そんな壮大な哲学体系の一体どこに御本人はいらっしゃるかと思えば、壮大な大宮殿の前の犬小屋に住んでいらっしゃるではありませんか、はて、一体どうしたことなのでしょう？と皮肉ったことで有名。大事なのは壮大な哲学体系などではなく、この自分自身にとっての真実、神を前にして唯一人で立った時の自分の真実が大事なのだ、と主張した。最期は、新聞『祖国』と自費のパンフレット『瞬間』でデンマーク国教会を攻撃し、路上で昏倒し、病院に運び込まれ、約一ヵ月後、そのまま死んだ。大学生であった二十二歳の頃の彼の日記から、彼に特徴的な考え方を引用しておこう。

「……私に欠けているのは、私は何をなすべきか、ということについて私自身に決心がつかないということなのだ。……私にとって真理であるような真理を発見し、私がそのために生き、そして死にたいと思うようなイデーを発見することが必要なのだ。いわゆる客観的真理などを捜し出してみたところで、それが私に何の役に立つだろう。哲学者達の打ち立てた諸体系をあれこれと研究し、求められればそれについて評論を書き、それぞれの体系内に見られる不整合な点を指摘し得たにしたらところで、何の役に立とう……」（梶田啓三郎「キルケゴールの生涯と著作活動」『世界の名著 40・キルケゴール』中央公論社、昭和 48 年所収、20 頁）。

- 3) なお、キルケゴールは、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』において、仮名で書かれた著作が全て自分のものであることを認めた上で、「したがって私の希望、私の願いは、もし誰かがこれらの書物のたったひとつの言葉だけでも引用しようと思いついたなら、当該の仮名の著者の名前前で引用して、私の名を挙げたりしないで頂きたいということである」（ヨハンネス・クリマクス著、S. キルケゴール刊行『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』杉山好、小川圭治訳（『キルケゴール著作集・9』白水社、1973 年、403 頁））と述べてはいるが、『哲学的断片』を「キルケゴール著」ではなく、「ヨハンネス・クリマクス著」と書くのも今更の感じがするので、「キルケゴール著」で通した。
- 4) ソクラテスの靈魂不滅説については『パイドン』が最も詳しいが、朝から死刑執行が行われる日没までの最期の一日のソクラテスの発言という余りにも劇的な設定、その構成の見事さ、及び、そこに見られるアイデア論からして、プラトンの創作という面がかなり強いと思われるので、本稿では用いない。